

「日本のものづくりはもう勝てないのか!?!」

浅川基男 (著)

単行本 (電子書籍), ¥1,056-
(幻冬舎, 2021年6月16日)

1998年、千葉大学が日本で初めてとなる「飛び入学制度」を導入し、3名の「17歳の大学生」が誕生して話題となりました。その中の1人を追跡した記事を、これまでに何度か目にする機会がありました。そこには大学院修士課程を修了し、研究職へ就いたものの、薄給で生活できないため、現在はトレーラーの運転手をしている旨が書かれていました。これは一例であるものの、主観的にも客観的にも日本の若手研究者・技術者の置かれている環境は決してよいとは言えないでしょう。

一方で最近、大学の低レベルな実務家教員を問題視する記事をよく目にするようになりました。「査読論文がないのに教授になる」、「まるで天下り先と勘違い」など、と信じられない内容が次々飛び出し、とある記事に至っては「別に研究したいとかじゃない。ただ肩書が欲しいだけ。70歳くらいまで楽に仕事できそうだし、女子大生と話せるから楽しいでしょ。」と述べる男性まで登場する始末。ネットニュースの記事ですので多少誇張した表現である可能性もありますが、読んでいて怒りを覚えました。「教育・研究・社会貢献」の三本柱を掲げ、未来の日本を担う若者を育てなければならない大学教員の責務を、このような意識の低い方が果たせるのでしょうか？

本書はプロローグ、エピローグを除くと三部構成になっています。第一部では日本のものづくり産業の歴史が分かりやすく解説されています。幕末から明治期に築き上げられてきたものづくりへの思いと実績は、日本を列強の仲間入りをさせることに大きく貢献しました。その後、敗戦を経てゼロからのスタートとなった日本ですが、造船、鉄鋼、自動車、そして半導体などの分野で目覚ましい発展を遂げ、再びものづくりの世界でトップに躍り出ることになります。ところが、時代や社会の変化により、これまで日本が得意としていた「加工貿易によるものづくり」すなわち「加工立国」スタイルでは成り立たない局面にきています。これを踏まえた上で第二部では、情報化社会への適応の遅れ、ベンチャー企業の支援不足、勢いをなくしつつある国内の研究開発動向の現状がまず説明されています。そして、将来に希望を持たない大学生をはじめとする若者、大学の教育レベルの低下、人材に投資をしない日本企業、そしてこれらについて対策をしない日本政府の現状が定量的・数値的なデータを元に客観的に述べられています。そして、第三部は著者が考える「ものづくり再興戦略」を「材料とものづくり技術」、「アナログとデジタルものづくり」、「個人が思いを主張する社会」、「人口減少と社会システムのスリム化」の4つの観点から提案して締められるという、非常にまとまりの良い内容となっています。

この問題は研究者・技術者の個人のみならず、産・学・官が複雑に絡みあっており、現時点で有効な解決策を見い出せていないのが現状です。しかし、それ以前にこの問題があまり知られていない、というのが一番の問題であるように思えます。室内環境学会は大学生、大学教員、企業、公的機関が一堂に会するという大きな長所をもつコミュニティです。この長所を生かし、将来の日本を担う優秀な研究者・技術者を育て、彼らの正当な評価と活躍場所の提供を広めるコミュニティになればと思います。本書を紹介させていただきます。室内環境学会が産業技術立国の再興に貢献できることを願って！

(フロンティアフーズ株式会社 技術部 村田真一郎)